

# ものづくりの楽しさと難しさ

高等専門学校・機械工学科・4年

期間：令和7年8月25日～29日（5日間）

私は5日間のインターンシップに参加しました。実習や講義を通じて、「今までにない機械を一から考えること」の楽しさと難しさを深く学ぶことができました。

実習では、「今までにない食品加工機械を考える」というテーマのもと、班ごとに「こんな物が食べたい・作りたい」というアイデアを出し、それを実現するための機械を考案し、スライドにまとめて発表しました。私の班では立方体で三つの面から丸・三角・四角の穴が貫通している、空洞構造のユニークなグミを作る機械を考えることにしました。一般的なグミの製造方法を調べた上で、どうすればその形状を実現できるかを検討しましたが、ひとつの問題を解決するとすぐに別の課題が浮上し、なかなか考えがまとまりませんでした。形状を実現する機構だけでなく、効率的な製造方法、コストの抑制、実現可能性なども並行して考える必要があり、非常に難しく感じました。しかし、売り物になる機械を作るには、これらの要素を意識することが不可欠であると学びました。

さらに、私たちの班ではグミ自体も「今までにない製品」だったので、食感やターゲット層など、営業的な視点からも検討する必要があり、設計・製造とマーケティングの両方からのアプローチが求められました。それでも、班で意見を出し合いながらアイデアが徐々に現実味を帯びていく過程はとても楽しく、苦痛に感じることはありませんでした。

また、機械の製作費だけでなく、実際に稼働させる際の電気代などの運用コストについても考慮する必要があることに気づかされました。機械は「作って終わり」ではなく、使い続けることを前提に設計する必要があると学びました。使用する材料についても、食品を扱う機械だからこそ、異物混入のリスクを防ぐための工夫が求められることを教わりました。

意外なものがヒントになることも多く、分野に問わず幅広く興味を持ち、経験を積むことで、より多くのアイデアが生まれると感じました。実際、工場見学で見せていただいた設備や、自分の趣味がアイデアの参考になった場面もありました。複雑な型や機構の設計には3DCADも活用しましたが、自分のイメージが形となって画面に現れる瞬間はとても楽しかったです。

意見やアドバイスを求める際には、「今何をしているのか」「何をしたいのか」「何が必要なのか」を明確にし、言葉や図で分かりやすく伝えることが重要であると実感し、コミュニケーション能力の大切さを改めて感じました。実習や見学だけでなく、生成AIについての講義にも参加させていただきました。現在の技術に発展状況や、今後の展望、活用方法など、普段なかなか聞けない貴重なお話を伺うことができ、大変勉強になりました。

短い期間ではありましたが、非常に多くのことを学ぶことができました。どこにもないような機械を一から考えて作ることは、考えることが多く難しいですが、それ以上に楽しいと感じました。これまでは仕事は「シンプルで楽な方が良い」と思っていたのですが、これからは、「自分が楽しいと感じるかどうか」で選びたいと思います。

# やりたいことを考える第一歩

大学・看護栄養学部・3年

期間：令和7年8月27日～29日（3日間）

私は今回、製造業での3日間のインターンシップに参加させていただきました。インターンシップでは、販売管理部、品質管理室、EC・特販事業部などの部署ごとの業務内容を学ぶことができました。特に、販売管理部ではグループワークを通して実際に商品企画を体験することができ、貴重な経験となりました。

私は今回のインターンシップから、たくさんのことを学びました。1つ目は、新商品ができるまでの企画の手順や、考え方です。商品コンセプトでは、誰に向けた商品にするのか、商品をどのように使ってもらうか、どうしてその商品を作るのかのWho、How、Whyを考えて基礎を固めることが商品企画を進める最初の一步でした。実際のグループワークでも、この3つが決まると商品の方向性も定まり、スムーズに商品企画を進めていくことができました。また、購買者が手に取りやすい価格に抑えるためのコストカットの必要性も実感しました。仲間と意見を出し合いながら新しく商品を考えていくことはとても興味深い時間でした。私は将来商品企画に携わりたいと考えていましたが、この体験を通してその気持ちが強くなりました。

2つ目は、大学の専門分野として学ぶ知識以外の資格や経験も活かすことができることです。実際に、アイシングクッキーの資格を持っている社員さんが、普段は生産部門には所属していないが、イベントでは子ども向けの体験企画に関わっているというお話を聞きました。趣味や特技も仕事の場で活かすことができると知り、自分の趣味も強みにできるようにより真摯に取り組みたいと思いました。

3つ目は、継続していくことの大切さです。インターンシップでは、商品の包装作業を体験させていただきました。私は一つの包装でも時間がかかり、ゆるくなってしまいましたが、社員の方のお手本はとてもきれいですばやく、崩れにくいような工夫がされていました。その手際の良さから継続して繰り返すと上達することを実感し、難しいことでも諦めずに何度も挑戦しようと思いました。

今回のインターンシップでは、部署ごとの業務説明や体験、工場、直営店の見学などをさせていただきました。これまでは漠然と食品会社に就職したいと考えていましたが、インターンシップを通して、新商品を企画していくことに特に興味を持ちました。これからは学んだことを活かし、何事も意欲的に取り組むとともに自分が既に持っている強みにも目を向け、より強みを伸ばしていけるように励んでいきたいです。

# チームで働くことの実感

大学・国際文化学部・3年

期間：令和7年8月25日～29日（5日間）

私は将来大学で学んでいる技術を生かした仕事がしたいと思い、8月25日から8月29日までの5日間、印刷会社のインターンシップに参加させていただいた。

インターンシップでは、まずオープンカンパニーに参加した。その中の会社見学では、実際に教科書や冊子の型作りから印刷、製本までの工程を見学した。普通のプリンターでは出せない色や出来ない加工も行える、特殊なプリンターも見せてもらった。次に社員の方と座談会をさせていただいた。社員は営業課と企画課の2名で、自分のキャリアや業務について、また何気ない質問等に関しても懇切丁寧にお話ししてくださった。

そして、今回のインターンシップ全日程を通して行われたのが、他大学の方々と共同で行う仮想クライアントへの企画立案・デザイン実習だ。内容は、季節のフェアのPOP制作と、フェアに合わせた商品の告知方法や販売方法、お店のPRを含めた展開案の提案である。今回は2-2に分かれ企画とデザインを分担し、各々が製作した企画・デザインに対して社員の方々から指摘をいただくという貴重な体験をさせてもらった。私は普段からIllustratorを用いて大学の課題制作を行っているが、自由な制作では気づけないことや新たな発見が数多くあった。また企画側からの提案を受けて、短い期間の中でさらにデザインを追加するなど、発想力や創造力も鍛えられたように思う。実習の間には、冊子の表紙をかざる料理の撮影風景の見学もさせていただいた。撮影現場の隣で調理し、撮影中も機敏に作業を行っていた。

今回のインターンシップで学んだことは大きく二つあり、まず会社の雰囲気だ。朝礼に参加し、業務をこなして時間になれば帰宅するという、会社で働くことの実感を得られた。また、実習において、報連相や認識のすり合わせ、チームで自分が率先して行動することの重要性を学んだ。次にデザインに関する技術である。Illustratorに関する技術だけではなく、ポスターデザインのセオリーや工夫を教えてもらった。さらに、中間発表や最終発表では、デザインや企画両方についてのアドバイスに加え、営業や様々な立場からの多角的な視点からのコメントもいただいた。今回インターンシップに参加させていただいた（実習先）はとても気さくな方が多く、特にチューターの方々には何度も気にかけていただいた。

今回のインターンシップを通じて、広告のセオリーや印象をよくする細かな工夫など、デザイン力の向上が必要だと感じた。さらに、協同作業に必要な能力や協調性などの対人能力、人間力の向上も今後の課題とする。

インターンシップの担当をしてくださった方、また送迎などお世話をしてくださった総務課の皆さま、課題の企画・デザインに対して指導をしてくださった企画・デザイン課の皆さま、ひいては貴重な機会をくださった社員の皆さまに深く御礼申し上げます。

# 仕事の向こう側にいるお客様

大学・国際文化学部・3年

期間：令和7年8月25日～29日（5日間）

私は令和7年8月25日から29日の5日間、印刷会社でインターンシップを経験させていただいた。その5日間の中でたくさんの貴重な経験や気づきを得ることができたが、その中でも特に印象深かった気づきについて記述する。

私が5日間のインターンシップの中で一番印象に残った気づきは、ただ自分の持っている仕事をやり切ってそこで終わり、ゴールなのではなく、その仕事の向こうにお客さんがいて、自分の作った成果物を「使う」人、成果物が置かれる環境があることをきちんと理解できていなかったということだ。

インターンシップ3日目は営業企画課にてお客様に提案する商品紹介のパンフレットのデザイン案を3つ作るワークを行った。そのデザイン案を提出し、フィードバックをいただいたときにどのターゲット層に、どんなシチュエーションで使われる、おかれることを考えて作ったデザインなのかを満足に説明することができなかった。どういう意図でデザインしたかははっきりと答えられたのに、実際に使う顧客のことを考えてデザインすることができていなかったのである。そこで担当の方に指摘してもらい、初めて自分が学校でも（実習先）でも教わった「誰をターゲットとして、どんなシチュエーションで使われるかを想像してデザインを作る」ということをきちんと理解し、実践することができていなかったことに気が付かされた。知識として頭に入っていて、デザイン案を作るときにもそれを頭に留めて作ったはずなのに、知識をきちんと理解し、実践するということがいかに難しいかということを経験した。

また、自分の仕事の向こうに実際に成果物を使うお客さんがいること、その依頼者に対しての利益をもたらす仕事をしているという自覚が足りなかったし、それに気づいておらず、イメージができていなかった。いつも学校の課題でデザインを作るときにはそのような意識をしたことがなかったため、これが仕事と学校の課題の違いであり、社会人と学生の意識の違いなのだと改めて感じることもできた。

この体験、気づきから、ただ自分の仕事をやり切って終わりなのではなく、そのあと自分の仕事は会社のほかの部署、お客様や環境にどのような影響をもたらすのかということを経験して仕事することが重要なのだと学んだ。自分の仕事をおろそかにすれば自分の仕事は次に回る部署の仕事に悪い影響をもたらすし、もちろんお客様にも満足してもらえない。その結果営業などの仕事をとって行く部署が大変な思いをするかもしれない。これらを想像し、自分の仕事が悪影響を及ぼさないように、良い影響に代わるように考えながら仕事をしていくというのは想像以上に大変で様々なことに配慮する必要があった。これらの学びは学校に戻ってからデザインを学び、作るときはもちろん、社会に出た後も仕事をするうえで重要な気づきであり、どんな仕事をするうえでも重要な考え方である。したがってこれからの社会生活において生かしていきたいと思う。

# 責任感と工夫が支えるものづくり

大学・国際文化学部・2年

期間：令和7年9月8日～12日（5日間）

今回のインターンシップでは、製造・営業・企画という3つの部署を体験させていただいた。短い期間ではあったが、実際の現場に身を置くことで、教室の学びだけでは得られない貴重な気づきを多く得ることができた。その中で私が強く学んだのは、「ものづくりを支えるのは一人ひとりの責任感と工夫である」ということである。製品を形にする現場から取引先との営業活動、さらに商品企画に至るまで、どの場面でも社員の方々が誇りを持ち、真摯に業務に向き合う姿勢が印象に残った。

まず製造部門では、私たちが普段何気なく目にする箱が完成するまでに、想像以上に多くの工程と人の手が関わっていることを知った。紙の裁断や印刷、貼り合わせ、検品など、一つひとつの作業が丁寧に行われており、その積み重ねが最終的な製品の品質を支えていた。特に印刷現場では、インクのわずかな色のずれを見逃さず、納得のいくまで微調整を続ける姿に、職人としての強い責任感を感じた。ここには機械の精度では代替できない、人の感覚と経験が生かされていた。また、単に効率を追求するのではなく、「どうすればより良いものをつくれるか」を常に考える姿勢から、日々の小さな工夫の積み重ねこそが企業の信頼を築いているのだと実感した。

次に営業部門を体験し、ものづくりの現場を支える「人との関わり」の重要性を学んだ。営業の方々は取引先との打ち合わせにおいて、製品の知識や仕様を正確に伝えるだけでなく、相手の要望を丁寧に聞き取り、信頼関係を築いていた。単に商品を売ることが目的ではなく、「お客様が本当に求めている価値は何か」を考え、それに応える提案をする姿勢が印象的だった。営業の現場には、製品知識だけでなく、相手の立場に立って考える力や、状況に応じて臨機応変に対応する力が求められることを学んだ。

さらに企画部門では、架空の店舗を想定したお菓子の詰め合わせの箱づくりに挑戦した。箱のサイズや形状、帯やシールのデザインを考える作業は、見た目の美しさだけでなく、実際の使いやすさや内容物とのバランスなど、多方面からの視点が必要だった。例えば、箱が少し大きすぎると中身が動いてしまい見栄えが悪くなるため、何度も配置を変えながら試行錯誤を重ねた。この過程は、まるでパズルのようにありながら、完成した時の達成感は非常に大きかった。また、自分のアイデアを社員の方々に見ていただき、具体的なアドバイスをいただいたことで、デザインを形にする難しさと面白さの両方を実感した。自分の発想が少しでも評価されたことは大きな励みとなり、創造することへの意欲がさらに高まった。

この5日間を通じて、社会で働くには知識や技術に加え、責任をもって取り組む姿勢と課題に応じて工夫を重ねる力が不可欠であると学んだ。また、大学の学びが直接的に専門知識に結びつかない場面でも、観察力や発想力、そして人と関わる力が現場で活かせることを実感した。本実習で得た経験を、今後の学びや将来の進路選択に生かし、社会の一員として自ら考え、行動し、価値を生み出せる人材へと成長していきたいと思う。

# 実際の現場で働くこと

大学・工学部・3年

期間：令和7年9月1日～5日（5日間）

私が今回のインターンシップに参加した理由は、機械系の事業所に参加し、実際の現場での雰囲気や仕事内容を知りたいと思ったこと、また学校の授業でCADや設計に興味を持ち、(実習先)で油圧機的设计を体験させていただけると伺ったためである。

今回のインターンシップでは、1日目から3日目の昼まで品質保証部での仕事を体験した。品質保証部では主に受け入れ検査に取り組んだ。受け入れ検査とは、ノギスや粗さ測定器などの機器を用いて検査項目に異常がないか確認する業務である。3日目の昼から5日目までは製造部で、実際に使用されている部品の設計を体験した。

私が今回のインターンシップで感じたことは2つある。

1つ目は、コミュニケーションをとることの大切さである。品質保証部での業務は、ノギスや粗さ測定器など学校では触れる機会のない機器を使うことが多かった。そのため、社員の方の一度の説明だけでは理解しきれない点や、ノギスで測りにくい部分の測定方法を遠慮せずに質問することで、作業を効率的に進めることが出来た。また改めて聞き直すことで理解が深まり、ノギスの使い方のコツを知ることが出来た。さらに、受け入れ検査の際にエクセルの値と誤差が生じたが、その場ですぐに社員の方に報告することで、部品の検査に迅速に対処することができた。

2つ目は、与えられた課題をこなすだけでなく、自分で考えて行動し、正確な情報をもとに判断することの重要性である。それを強く感じたのは、3日目から取り組んだ部品の設計業務である。ここでは実際の部品を測定し、その形状を一から図面に起こす業務を体験した。学校で行う製図は、完成した設計図をもとに作成したり、教授と一緒に進めたりと正解がある状態であった。しかし現場では、ノギスで測定し、形状を推測しながら進める必要があった。最初はどの部分から測定すべきかわからず、思うように進められなかった。そこで全体像をイメージし、部品の機能や組み合わせを考えながら、自分なりに部品に近い形状を図面に起こしていった。また、社員の方からアドバイスをいただきながら進めることで、誤差を抑えて図面化することが出来た。

最後に、今回のインターンシップを通して、現場では学校の学びとは異なる力が求められると実感した。実物を測定して一から図面を作成する業務では正解が用意されておらず、自分で考えて判断する必要があった。また、作業を効率的に進めるには社員の方との情報共有や、わからないことを積極的に質問する姿勢が欠かせないと感じた。これらの経験から、今後は自ら考えて行動する姿勢と円滑なコミュニケーションを意識することを心掛けたい。大学での学びや研究活動でも、ただ課題をこなすのではなく、なぜその作業が必要なのかを理解し、自分なりの考えをもって生活していきたいと思った。そして将来は、現場で求められる柔軟な発想とチームワークを活かし、周囲と協力しながら目標達成できる技術者を目指していきたい。

# 認識変化

大学・工学部・3年

期間：令和7年9月8日～12日（5日間）

私は本就業体験を通して二つの気づきを得た。一つ目は、「自分の就職活動に対する認識がいかに曖昧で解像度の低いものであったか」ということ、二つ目は、日々当たり前のように働く社会人の方々の偉大さである。

一つ目の気づきである「就職活動や業務に対する解像度の低さ」について、インターンシップに参加する前は、私はやりたいことや向いている仕事について、ある程度のイメージを持っているつもりだった。しかし、実際に現場で働かされている方々を見ると、そのイメージがいかに表面的で具体性に欠けていたかを痛感した。

例えば、私は「チームで協力して仕事をするのが好き」と漠然と考えていた。しかし実際の現場では、チームワークとは単に仲良く作業することではなく、各自の専門性を活かしながら、時には意見をぶつけ合い、納期と決められた期限内で最適解を見つけ出ししていく過程そのものであることを知った。この「協力」の実態は、私が想像していたものとは全く異なる、はるかに複雑で高度なものだった。また、業務の全体像についても理解が浅かった。職業体験をさせていただいたタイミングがちょうど新製品の開発中であったため、一つの製品が完成するまでの裏には、膨大な地道な作業、調整、確認作業が存在していた。社内上層部への成果報告前の形容しがたい緊張感や、社内での報告・相談、JIS等の規格を実験データが満たしているかのデータ精査、法規制の確認など、そういった仕事にこそ仕事の本質があることを学んだ。また、「働く」ということについても、解像度が低かった。学生としての私は、仕事とは単に与えられた課題をこなすことだと思っていた。しかし社会人として働くということは、自ら課題を見つけ、優先順位をつけ、周囲と調整しながら、組織全体の目標に貢献していくことであった。この主体性の違いは、学生生活との最も大きな違いであると感じた。

二つ目の「社会人の偉大さ」について、インターンシップを通じて最も印象に残ったのは、日々当たり前のように働いている社会人の方々の偉大さである。驚いたのは、社会人の方々の時間管理能力と処理能力の高さだった。複数の作業を同時に進行させながら、突発的な問い合わせにも即座に対応する姿を見て、私は自分が一つのタスクに四苦八苦していることに、自身に失望さえした。また、専門知識の深さにも圧倒された。指導してくださった方は、私の質問に対して瞬時に的確な答えを返すだけでなく、その背景にある理論や実務での応用例まで説明してくださった。その知識は、長年の経験と継続的な学習によって培われたものであることが伝わってきた。社会人になっても学び続けることの重要性を、身をもって示していただいた。本就業体験で得た学びを生かし、自身のキャリアについて考えていきたい。

# 実務体験が教えてくれた仕事の本質

高等専門学校・機械電気工学科・4年

期間：令和7年9月1日～5日（5日間）

私は県内の総合化学メーカーにて、5日間の就業体験に参加させていただきました。化学メーカーという普段あまりなじみのない業界で、機械・電気系のエンジニアの方がどのようにご活躍されているのかを知りたいと思い、電気系を専攻する学生を対象としたインターンシップに参加させていただきました。

今回のインターンシップでは会社説明や設備見学のほか、受配電設備の設計プロセスの一部を体験させていただきました。設計実習では実際の業務に近い内容の実習を行わせていただき、仕事への理解が少し深まったように感じます。また、現在通っている学校のOBの方ともお話しする機会があり、会社のことだけでなく卒業後のキャリアのことについても教えていただき、とても充実した5日間を送ることができました。

今回のインターンシップではたくさんの学びがありましたが、その中でも特に印象に残った2点について述べます。1つ目は、「人に伝える力の大切さ」です。会社では様々な部署や立場の人が連携して仕事を行っていました。今回私がお世話になったのは電気系の設計を専門とする部署でしたが、他にも電気の保全部署や機械の部署、予算を組む部署、さらにはプラントを建設する業者の方など多くの関係者の方がかかわっていることを知りました。その中で特に感じたのは、情報を正確に、かつ分かりやすく伝える力（伝達力）の重要性です。会社内外問わず、情報の伝え方に誤解や食い違いがあると、後の工程でトラブルにつながる可能性があります。だからこそ、自分の意図や必要な情報を相手に正しく伝える力が、必要不可欠だと感じました。

2つ目の学びは、「何事も根本から理解することが重要」ということです。今回のインターンシップでは計算を用いた設計実習を行いました。その際、与えられた公式に数値を当てはめて計算するだけではまったく意味がないということを学びました。この計算が何を表しているのか、そもそもなぜこの式が出てくるのかなどを理解したうえで計算しないとどのくらいまでは許容範囲なのかということや、どこを検討しなければならないのかなどを考えることが難しく、設計業務をすることは難しいなと感じました。これは設計業務だけにいえることではないと思います。普段の数学や物理の勉強でも式の導出を理解しておくことでその後の応用に生きてくるし、何より物事全体の理解が深まると思います。

私は今回のインターンシップで仕事に対する意識が大きく変わりました。ただ業務をこなすだけではなく、周囲の人と連携し、様々な分野の人の視点で物事を考えながら仕事をする大切さを学びました。今後はただ知識や技術を習得するだけではなく、後に社会でその知識を使うことも考えながら勉学に励みたいなと思いました。

今回のインターンシップを通じて、普段の生活では得ることのできない多くの学びや気づきを得ることができました。今回の経験を今後の学習や進路選択に活かし、成長につなげていきたいと思いません。この度は貴重な体験をさせていただきありがとうございました。